

『掛川誌稿』の編纂者・斎田茂先の生涯

Ⅱ松崎慊堂による「墓銘」を中心にⅡ

中山正清

はじめに

掛川藩校教授を務めた松崎慊堂は、松ヶ岡山崎家四代目の万右衛門（農園）、弟子の海野予介（士黙）をはじめ、多くの掛川藩関係者と親しい間柄にありました。中でも特に心を許していたと思われるのが、斎田茂先（士華）です。

茂先は『掛川誌稿』の巻首から巻六（総論から佐野郡全域までに相当）までをまとめましたが、文化十二年（一八一五）に四十二歳で病死しますので、文政六年（一八二三）四月以降しか現存しない慊堂の日記『慊堂日曆』には登場しません<sup>①</sup>。しかし、『慊堂全集』<sup>②</sup>には、茂先に触れた文がいくつもあり、また、全集には収録されていませんが、慊堂が茂先のために文を撰した「斎田君墓銘」<sup>③</sup>もあります。

現在では、茂先といえば『掛川誌稿』の編纂者としてしか知られていませんが、「墓銘」をはじめとする慊堂の文からは、歴史研究に熱心で書道や雅楽の道にも秀でていた茂先の姿が浮かび上がってきます。

茂先と松ヶ岡山崎家との関係は、農園の依頼によって慊堂が文を撰した「山崎定地君碣陰記」の文字を茂先が書いたことぐらいしか見当たりませ

---

① 鈴木瑞枝著『松崎慊堂』（研文出版、二〇〇二年）は、「掛川藩中の人で最も慊堂と仲の良かったのは、長塩家の人たちである」（一一〇頁）としている。長塩家の人物の名前が『慊堂日曆』にしばしば登場することから、このように記したと考えられる。

② 全六冊、崇文院、一九二六年刊。冬至書房より一九八八年に復刻。本稿では、引用した文の巻数だけを註記した。

③ 「斎田君墓銘」は、昭和十一年（一九三六年）に『静岡県郷土研究』第八輯で、尾澤只一「掛川誌稿前半の著者斎田士華について」として初めて報告された。『掛川市史』中巻（掛川市、一九八四年）九百八十〜九百八十一ページ、『掛川誌稿（全）』（名著出版、一九七二年）八百三〜八百四ページに収載されている。

ん。しかし、晨園が師事した松崎慊堂の親友であり、茂先と山本忠英が編纂して慊堂が校正した『掛川誌稿』が山崎家に伝わっていた<sup>④</sup>ということもあり、この『以善会レポート』で取り上げることになりました。

### 一、「齋田君墓銘」の読み下し

まず、慊堂が撰した「齋田君墓銘」の全文の読み下しを以下に掲げます。『掛川市史』中巻に掲載されている「墓銘」の訓点、送り仮名を参考に一部を改め、適宜改行し、旧字体は新字体に改めました。( )内は筆者による註記です。

#### 齋田君ノ墓銘

齋田士華、諱いみなハ茂先、初名ハ茂利、三左衛門ト称ス。上祖ヲ益田伊勢守藤原繁俊ト曰フ。上野国大胡おおごノ城代タリ。四子有リ、繁政・繁通・繁吉・茂安。繁吉、丸橋三左衛門繁実ヲ生ム。始はじめテ我が太田顕公(資宗)ニ仕へ、家老ト為リ、氏ヲ齋田ト賜フ。蓋けだシ同姓ニ比シテ云フ。是これニ由テ齋田氏ト為シ、繁紹・繁明ヲ生ム。繁紹父ノ職ヲ襲つギ、繁明仕テ用人ニ至ル。用人之後、三世微(衰える)、曰ク繁教、曰ク繁救、曰ク繁郷。繁郷、実ハ山角定吉之仲子ちゆうし(真ん中の子)、早ク死ス。其ノ季き(末子)茂矩ヲ以テ後ト為ス。茂矩仕テ大目付ニ至リ、石居氏ヲ娶めとリ、士華ヲ生ム。

<sup>④</sup>二〇一六年六月二十八日付『広報かけがわ』によると、山崎家に伝わっていた『掛川誌稿』を良太郎さんと文三さんの兄弟が市に寄付した際、「掛川城主が千葉松尾藩へ移る際、渡されたのではないかと先代から聞いている」(文三さん)と話している。

士華、一公（資愛）・栄公（資順）・円公（資言）ニ仕へ、中小姓ヨリ膳番兼掌刀外衛長ニ至ル。微告（ちよつとしたあやまち、災い）ヲ以テ二階ヲ褫ハル。公家譜牒ヲ掌リ、商推（あれこれはかつて決めること）理有リ、功ヲ以テ旧階ニ復ス。又命セラレテ掛川領志ヲ撰ム。未タ成ズ。下利（下痢）ノ疾ヲ得、月余、文化十二年九月十二日ヲ以テ江戸駒籠（駒込）邸舎ニ歿ス。享年四十有二。

士華、性開敏多能ニシテ、読ムコト有ラバ章句ヲ屑トセズ。尤モ書学ニ邃（奥深い）ナリ。輪池屋代翁（屋代弘賢）ニ事へ、持明藤公ニ及ビ、其ノ堂室ニ入ル。雅楽ヲ善クシ、郢曲（宮廷歌謡）ヲ理ム。意到リ興会スレバ（興にのれば）、鳴弾歌吹（演奏）ス。翰墨（詩文を作る）ノ間マ、淋漓（元氣のあるさま）転倒（落ち着きを失う）ヲ作シ幼眇（精緻、奥ゆかしい）哀豪曲其ノ到（ゆきとどく）ヲ尽ス。故ヲ以テ友道日ニ広ク、到ル所一座畢ク傾ク。晩ニ文ヲ余ニ問ヘバ、旬月（十日間）ニシテ又能ク其ノ言ハント欲スル所ニ道ク。著ス所尚古法帖卅卷、金石跋二卷、掛川領志未脱稿八卷。

宮崎氏ヲ娶リ、先ニ歿ス。一女アリ、甫メテ六歳、斎田氏はニ至テ三タ

ビ嗣ヲ亡フ。原田某ノ次子常吉ヲ養テ後ト為ス。死スルノ三日、谷中村本行寺ノ宮崎氏ノ壙ニ窆ル。

士華余ト同ク栄公ニ事ヘ、又相驩ブ也。既ニ病ム、余ニ謂テ曰ク、吾子ノ銘ヲ得、而テ輪池翁之ヲ書セバ、復タ恨ムコト無シト。則チ年将ニ祥（死者が死んだ月）ナラントス。余其ノ受業者ト相謀リ、石一ヲ具シテ、泣キテ之ニ銘シ、常吉ヲシテ往テ翁ニ請ハシム。翁曰ク嗚呼士華ノ託也、書セザルベカラズ。

銘曰ク

人資地（家柄）無キニ苦ム也、子ハ旧閥ノ胄。人材具無キヲ患フ也、子ハ実ニ百夫ノ秀。而仕テ顛レ以テ躓キ、天又之ガ年ヲ限ル。而テ終ニ下ニ位ス。吾レ厥ノ世ヲ叙シ、後嗣ニ示ス。嗟乎亦子ノ志也夫。

輪池源弘賢書

文化十三年秋九月十一日嗣子常吉謹立

広沢群鶴刻

## 二、名前と先祖

茂先の名前からみていきます。「墓銘」の冒頭で、士華を号とした茂先は、

初め茂利と名乗っていたこと、通称が三左衛門だったことがわかります。通称については、『掛川誌稿』編纂のための巡村調査などでは小源多と名乗っています<sup>⑤</sup>が、小源多の通称は「墓銘」には記されていません。先祖が「益田伊勢守藤原繁俊」ということから、斎田氏は藤原を本姓としていたことも明らかにあります。なお、本稿では煩雑になるのを避けるため、基本的に茂先の名前を使います。

次に茂先の先祖についてみると、『大胡町誌』（大胡町、一九七六年）が引く「藤原姓益田氏系図略記」によると、藤原秀郷の子孫で上野国大胡城（現群馬県前橋市）を築いた益田氏はその後、新田金山城の横瀬氏に属したのですが、茂改のとき大胡城を失い勢田郡に移りました。その子が「墓銘」に名前がある繁俊です。「藤原姓益田氏系図略記」から引用すると次の通りです。

繁俊 母横瀬左衛門尉景繁女 与三左衛門尉後任伊勢守法名玉翁宗林

弘治二年正月九日戦死

天文二十辛亥年伊勢崎ノ一揆ニライテ旧領数代ノ大敵那波刑部少輔  
ヲ撃取此時大胡モ暫領内トナル

繁俊は「数代ノ大敵」である那波氏を討ち取ったことから、斎田氏の祖にふさわしい人物とされたのでしよう。繁俊の跡を継いだ繁政のとき、天正十八年（一五九〇）の豊臣秀吉による小田原北条氏攻めで、繁政は横瀬氏とともに北条方として信濃の笛吹で戦い、戦後は横瀬氏の改易に伴い常陸牛久に移りました。

繁政の弟繁吉の動向はわかりませんが、その子の丸橋繁実が初めて太田

---

<sup>⑤</sup> 『掛川市史』中巻九百七十六〜九百八十ページ、九百八十三ページ。

また、尾澤只一「掛川誌稿前半の著者斎田士華について」は、「山崎常盤翁は士華の調査にわざわざ上京して、谷中の本行寺を訪ねたり、斎田家をも訪ねられた。斎田家に言い伝えらるゝところによると『茂先』は『しげとき』とよむ由である。又通称を『小源太』とも云った由である」と記している。

資宗に仕えて家老となり齋田姓を賜りました。繁実が太田家に仕えるようになった経緯も不明です。

ただ、資宗が土井利勝から鹿毛の馬をいただき、資宗が齋田三左衛門繁至に預けたところ、その夜中に馬の尻尾がネズミに食い切られたという話が『太田家記』（国立公文書館デジタルアーカイブ）<sup>⑥</sup>に載っています。他愛もないエピソードですが、同書に太田家の家臣が登場するのはこの個所だけです。この『太田家記』は「繁至」の脇に「繁実」と註記していて、繁至は繁実のこととしていますから、家老に取り立てられた繁実は、太田家中でそれなりの存在感があった人物だったことを示しているのかもしれませんが。

繁実の長子繁紹は家老職を継ぎ、その弟の繁明は用人となったといえますから、この時期の齋田家は羽振りが良かったことでしょう。用人とは、「財政をはじめ庶務全般を扱い、家政・公務の中心となった役人。格式は大名家では番頭の下」<sup>⑦</sup>ですから、その地位は家老ほどではありませんが、藩政の中心だったことになります。

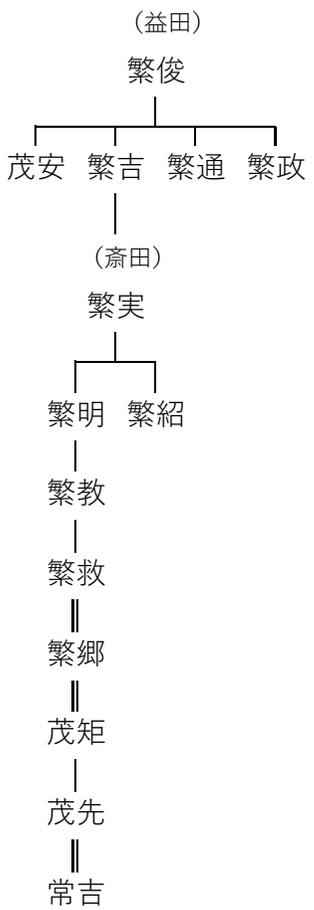
しかし、繁明の後の三代は目立った役職に就くことはありませんでした。茂先の父茂矩が大目付になり、齋田家は再び日の目を見るようになったといえます。

茂先は妻を宮崎氏から迎え、女子一人をもうけましたが、女子は六歳で没してしまいます。墓銘が「齋田氏は二至テ三タビ嗣ヲ亡フ」というのは、繁救、繁郷に嗣子がいなかったのに続けて茂先にも跡継ぎがなかったことをいうのでしょうか。妻も茂先に先立って没しています。跡継ぎのいない茂先は、原田某の次男常吉を養子に迎えました。

「墓銘」をもとに作成した略系図は次ページの通りです。

<sup>⑥</sup> 明治十九年六月の校訂で「此本書ハ正徳四甲午年（※一七一四）六月上旬写被申候由」と記され、また、文中に宝永二年（一七〇五）の記事があることから、この間に成立したと考えられる。

<sup>⑦</sup> 『新版角川日本史辞典』（角川書店、一九九六年）「用人」項。



### 三、茂先の役職

茂先は中小姓として出仕し、その後には台所番兼刀番供頭（膳番兼掌刀外衛長）となりました。中小姓は「小姓組と徒士衆の中間の身分で、外出する主君に随行し、また配膳役に従事<sup>⑧</sup>」する職ですから、高い家柄の者が勤める役職とはいえませんが、主君の眼前で才能を発揮する機会をもつことができ、主君に認められやすい役職といえるでしょう。

台所番兼刀番供頭も中小姓と似た職務と考えられます。刀番は大名が江戸城に登城する際に玄関先で刀を預かる役職、供頭は大名の外出の際に供を取り締まる役職です。

実際、茂先は資順から信頼を得ていたと考えられます。文化二年（一八〇五）に亡くなった藩主太田資愛の墓誌を松崎慊堂が撰じたのですが、茂先はその記述の一部に異を唱え、新藩主資順によって茂先の意見が採用されているのです。資順が茂先の学識を信頼していたため、藩校教授である慊堂の文を改めたこととなります。

ところが、茂先に何らかの過失があつて、二階級格下げになってしまいます。この左遷がいつ、どんな理由によるものかはまったく不明です。その後、「公家譜牒」（主家太田家の系譜）の編纂に携わり、その功によって元の役職に戻ることができました。元の役職に戻った時期も不明です。

茂先の俸禄なども不明ですが、松崎慊堂が記した「秋萩帖跋」<sup>⑨</sup>には、茂先について「一貧如洗」とありますから、家計は豊かではなかったよう

⑧ 『広辞苑』第五版（岩波書店、一九九八年）「中小姓」項。  
 ⑨ 『慊堂全集』巻十二。

す。

茂先が元の役職に復してから、『掛川領誌』（『掛川誌稿』のこと）の編纂を命じられました。未完のまま、文化十二年九月十二日に江戸・駒込の藩邸で下痢のために死去してしまいました。享年四十二。

#### 四、書道と雅楽

「墓銘」は茂先について「性開敏多能」（開けっ広げな性格で聡明、多才）と評し、また、「友道日ニ広ク、到ル所一座畢ク傾ク」（友人は日ごとに増え、友人たちは皆、茂先の意見に影響された）としています。

茂先の聡明さについて「墓銘」は、「読ミテ有ル章句ヲ屑トセズ」（儒学の経典を読めば一言一句をおろそかにせず）、「晩ニ文ヲ余ニ問フ、旬月ニシテ又能ク其ノ言ント欲スル所ヲ道ク」（ある晩に経典の文の意味を謙堂に尋ねたことがあったが、十日後には実践していた）と記しています。

多芸多才な茂先でしたが、「墓銘」に「尤モ書学ニ邃ナリ」とあるように、特に書の道に深く通じていました。茂先の書道の師は屋代弘賢（一七五八～一八四一）で、公家の持明院家（持明藤公）の門にも入りました。

弘賢は、輪池と号した江戸後期の国学者で、幕府右筆として『藩翰譜続編』『古今要覧稿』『寛政重修諸家譜』を編纂。塙保己一を助けて『群書類従』の編纂・刊行にも貢献しました<sup>⑩</sup>。書については、「七歳の時より持明院流幕府書道師範・森尹祥を師として学び、後に持明院宗時入門、江戸時代を通じての能書家に数えられる<sup>⑪</sup>」とのこと。

山崎晨園が「山崎定地君碣陰記」の文字を書くよう依頼したのは、このような弘賢から所を学んだ茂先だったのです。山崎定地君というのは松ヶ岡山崎家初代の才兵衛のこと。山崎家の先祖の菩提寺だった慶雲寺（掛川市伊達方）境内に「山崎定地君碣陰記」が彫られた石碑があり、茂先の筆跡を見ることができま

す。前述したように屋代弘賢は、歴史研究にも大きな業績を残していますが、

<sup>⑩</sup> 『新版角川日本史辞典』「屋代弘賢」項。

<sup>⑪</sup> 國學院大學デジタル・ミュージアム「屋代弘賢」項。

茂先の歴史研究について調べていくと、弘賢の門下生が関わっていたことが垣間見えてきます。また、弘賢は五万巻といわれる大量の蔵書を「不忍文庫」に蔵していて<sup>⑫</sup>、茂先も利用させてもらうことがあったでしょう。茂先にとって弘賢は、書道にとっても歴史研究にとっても大きな影響を受けた恩師だったといえます。茂先の歴史研究については、稿を改めて紹介したいと思います。

次に、持明院家は、平安時代の三跡の一人藤原行成の流れである世尊寺家が絶えた後、享禄二年（一五二九）に当時の後奈良天皇の命で公事の書役を勤めるようになった家<sup>⑬</sup>です。屋代弘賢の師だった宗時は寛政七年に死去、その子基武は寛政元年に父に先立ち（享年三十三）、基武の子基敦は文化九年に三十二歳で死去しています<sup>⑭</sup>。基武以降の持明院家当主は短い期間で変わっているので、茂先が誰の代に入門したかは不明です。

茂先は自ら書を良くするだけでなく、古い書跡の研究にも力を注いでいました。「墓銘」に「著ス所尚古法帖卅卷」とある『尚古法帖』は、日本の古人の筆跡を集めたもの<sup>⑮</sup>で、『掛川市史』中巻は「後世に伝わっていない」としていますが、空海の書を模刻した第八、藤原行成の書の巻十八が現存しています。これら茂先の書道における業績についても別稿で詳しくみる予定です。

茂先は雅楽にも堪能で、宮廷に伝わる曲を習いました。特に笙が得意だったようです。「墓銘」によると、興に乗ってその気分になると演奏しました。また、詩文を作っているときは、調子のいい曲を演奏して気分転換したといえます。茂先の演奏は悲しい曲、勇ましい曲など、その曲に合う行

<sup>⑫</sup> 岡村敬二『江戸の蔵書家たち』（二〇一七年、吉川弘文館）三十二ページ。

<sup>⑬</sup> 『書道辞典』（東京堂出版、一九七五年）「持明院流」項。

<sup>⑭</sup> 西村慎太郎「近世持明院流入木道に見る公家家職」（『東京大学史料編纂所研究紀要』、二〇一〇年）。

<sup>⑮</sup> 細川潤次郎『梧園書話』下（西川忠亮発行、一九〇二年）所収「集古法帖尚古法帖」

<sup>⑯</sup> 九百八十二ページ。

き届いたものでした。

茂先は、おそらく持明院家から雅楽を学んだのでしょう。「墓銘」に「郢曲ヲ理ム」(宮廷歌謡を習得スル)とあり、また、茂先が亡くなる文化十二年のことですが、持明院基延は將軍徳川家斉の前で他の公家らと管弦を奏していて、雅楽の演奏が得意だったようですから、茂先の雅楽は持明院家直伝だったと推測しておきます。

茂先の演奏を慊堂がいかに愛していたかは、慊堂の「八月十四夜聞齋士華同諸士弄月西窪邸中乃有此寄」<sup>⑰</sup>によってわかります。

何年のことかは不明ですが、八月十四日の夜、茂先ら掛川藩士が西久保(現東京都港区虎ノ門)の江戸藩邸で小望月(陰暦八月十五夜の前夜の月)の月見をしていました。このとき自宅にいた慊堂は気分がたかぶって眠れず、書齋の薬棚の前で、かつて西山(神奈川県丹沢山地)で療養したことを思い出していました。

そして「想<sub>レ</sub>君共在<sub>二</sub>烟蘿間<sub>一</sub>、紫笙吹破碧山曉」(靄のかかった蔦の中で茂先が紫の笙を吹き、青みを帯びてきた暁の山の静けさを破る光景を想像する)と記しています。この夜の「璧月」(玉のような月)は、西山のような秘境で士華の笙を聞きながら眺めたいと思っただけでしょう。

## 五、茂先の死

「墓銘」は、茂先の死因を「下利」とだけ記していますが、松崎慊堂の文には茂先がもともと病弱だったことをうかがわせるものがあります。慊堂は享和三年秋、「書浴泉間採冊」<sup>⑱</sup>を記していますが、そこには、齋田茂利(後に茂先と改名)が持病を癒やすために相模国の西山に湯治に行ったことが記されています。茂先にはなんらかの持病があったのです。

また、慊堂の文には、茂先が亡くなった文化十二年の茂先の動向がわかるものがいくつもあります。

<sup>⑰</sup> 『松崎慊堂全集』卷十六。

<sup>⑱</sup> 『松崎慊堂全集』卷十三。

慊堂の「送齋田士華之二荒序」<sup>⑱</sup>によると、茂先は文化十二年四月十七日、徳川家康の二百年忌のために藩主太田資始に従って日光東照宮に赴いています。このとき資始は靈廟代参使という大役を担っていました<sup>⑲</sup>。

「送齋田士華之二荒序」には、「持明藤公」（このときの持明院家当主は基延<sup>⑳</sup>）が皇太子（後の仁孝天皇）の使いとして日光に行くのですが、基延が資始の随員に茂先を加えるよう薦めたため、茂先の日光行きが実現したことが記されています。

また、「士華長於記載。簡而不陋。煩而有要」（茂先は詳しく記録した。簡潔にして雑ではなく、複雑であっても要点を記している）と、この二百年忌の行事を茂先が記録したことも記されています。基延は茂先が記録係にふさわしいと考えて推薦したのだと考えられます。

慊堂の「書学法目録後」<sup>㉑</sup>には、同じ文化十二年のこととして、「亡友士華以ニ乙亥歳一入レ京。就ニ真蹟一鈎摹」（茂先は京都で高野大師空海の真跡とされる書を見つけて、これを写した）とあります。そして一ヶ月ほどの滞京のち江戸に帰ったのですが、「一病不レ起。是為ニ絶筆一」（病に倒れてそのまま帰らぬ人となり、空海真筆の写しが絶筆となってしまった）のです。「尚古法帖」第八を増補しようとしていたのでしょうか。

慊堂の「秋萩帖跋」<sup>㉒</sup>によると、いつのことかは不明ですが、茂先は手に入れた『秋萩帖』を模刻していたのですが、終りの数十行を残して亡くなってしまいました。そこで茂先から彫り方を学んだ屋葺久徴（士遠）が茂先の遺志を継いで完成させました。

久徴が完成させた『秋萩帖』の模刻に慊堂が寄せたのが、「秋萩帖跋」（文政六年）です。『秋萩帖』は平安中期書写の巻物で、前半に『万葉集』『古今和歌集』などの和歌四十八首を草仮名で書写し、後半に中国・東晋の書

<sup>⑱</sup> 『慊堂全集』巻二。

<sup>⑲</sup> 『続徳川実紀』第一篇（『新訂増補国史大系』第四十八巻（吉川弘文館、一九三三年））文化十二年四月十一日条。

<sup>⑳</sup> 『公卿補任』第五篇（吉川弘文館、一九三四年）。

<sup>㉑</sup> 『松崎慊堂全集』巻十三。

<sup>㉒</sup> 同右、巻十二。

家王義之の書状を臨写したもの。巻頭二首は小野道風、残りは藤原行成筆と伝えられています<sup>②4</sup>。

わずか五ヶ月ほどの間に江戸と日光、京都の間をそれぞれ往復、しかも家康二百回忌の次第を詳細に記録し、また、「尚古法帖」第八を増補しようとしていたのです。これに加えて『秋萩帖』の模刻に取り組んでいて、さらに『掛川誌稿』の編纂などの仕事も抱えていたはずですから、もともと病弱だった茂先の死は過労がもたらしたものと考えていいでしょう。

多くの仕事を未完成のまま残して、四十二歳という働き盛りで逝かざるを得なかった茂先について、松崎慊堂は「秋萩帖跋」で「為レ官。落々数奇。抱レ志入レ地」（官職は低く不遇で、志を抱いたまま葬られた）と記しています。

## 六、「墓銘」の経緯

「墓銘」には、慊堂が文を撰することになった経緯も記されています。それによると、茂先が死の床に就いたとき、慊堂に「吾子ノ銘ヲ得、而テ輪池翁之ヲ書セバ、復々恨ムコト無シト」（私はあなたに文を記してもらい、弘賢先生に字を書いてもらえたなら、思い残すことはない）と頼みました。

慊堂は茂先の一周年を前に文を作り、茂先の跡継ぎで養子の常吉を通して弘賢に依頼し字を書いてもらったのです。弘賢は「嗚呼士華ノ託也、書セザルベカラズ」（ああ、士華の願いなら書かないわけにはいかない）と引き受けました。この弘賢の言葉から、弘賢もまた弟子の茂先を愛し、その死を深く悼んだことがわかります。

「墓銘」の末尾の「銘曰く」以下の個所では、茂先の人生をまとめています。以下のように意識してみました。

人は家柄がないことに苦しむが、茂先は太田家譜代の武士。人は才能がないことに悩むが、茂先は百人に優れた才能の持ち主。しかし、仕事で失敗してつまづき、天は働き盛りでの死を運命づけた。このため、

<sup>②4</sup> 『新版角川日本史辞典』「秋萩帖」項。

低い地位にとどまったままで終わってしまった。私はその生涯を記し、跡継ぎに示す。ああ、それが茂先の望むことであろうから。

日本を代表する儒者の松崎慊堂が文を撰し、有数の能書家の屋代弘賢が文字を書いた斎田茂先の「墓銘」ですが、それを墓石に刻んだのも一流の石屋でした。

『静岡県郷土研究』に「斎田君墓銘」が初めて紹介されて以来、「墓銘」の最末尾は「広沢群鶴刻」と読まれています。これは「広瀬群鶴刻」の誤りだと考えられます。加藤勝不「御碑銘彫刻師広群鶴のこと」<sup>⑤</sup>によると、広瀬群鶴（略字名は広群鶴）は歴代の名乗りであり、江戸の石工の中で名匠とされました。

同論文によると、四世は文化六年（一八〇九）に亡くなっていますから、茂先の墓銘を彫ったのは五世の広瀬群鶴ということになります。五世は茂先が亡くなった文化十二年には、群鶴は慊堂の友人でもある儒学者佐藤一斎の父佐藤文英の墓碑を彫っています。

#### おわりに

尾澤只一「掛川誌稿前半の著者斎田士華について」によると、「谷中の本行寺にあるべき斎田茂先の墓は鉄道工事の為に同寺の墓地が狭められて現在は斎田氏代々之墓となつて居るから見る事が出来ない」ということです。

親友の松崎慊堂が記したように、その優れた才能にもかかわらず不遇な人生だったといえます。そして、その業績は『掛川誌稿』以外には忘れられ、墓も「斎田氏代々之墓」にまとめられてしまったようです。

しかし、茂先（士華）の名前が慊堂の文などに残っているのはせめても救いといえるでしょう。今後も茂先の忘れられた業績を掘り起こし、紹介していきたいと思えます。

（了）

---

<sup>⑤</sup> 『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第五四七号（一九九七年）所収。